

京都を代表する川といえば断トツで鴨川の名が挙げられますが、平安京造都以降の歴史を考えると、堀川ほりがわの存在も大きいのです。1963年に枯れ川となり、無残にもコンクリートの川床を曝し、大部分が暗渠ですが、かつては豊富な水量を誇っていました。

例えば、歌舞伎『辰橋』に次のような歌が出てきます。

「卯の花咲いて白々と 月照り渡る堀川の 早瀬の流れ落合うて 水音凄き辰橋」。細々とした川ですと、こうはいきませんね。鮎あゆを捕って食べたという記録(『日本三代実録』)も残っています。

ところで、堀川の起源には2説あって、賀茂川の流路を変えたとする「付替え説」と、もう一つは、大徳寺の南の、船岡山あたりからの「涌き水説」です。右図は「涌き水説」に基き描きましたが、赤い線が現在の流路で、青い線は平安京造営の頃、あるいはそれ以前の流路(古堀川)を示しています。つまり、ある時期に流路を真っ直ぐに南下させる工事が行なわれたわけです。そのために、堀川から水を引いていたと思われる神泉苑かみいづのゑん(・遊興用の園池)が、それ以降は堀川から切り離された姿になったとのことです。

「涌き水説」だと、今では全くの市街地に源流地点があることになりませんが、平安京以前には原生林(・今でも下鴨神社に南接する糺ノ森)で見られます)で覆われた地域だったそうですから、そうした疑問も解消するでしょう。私たちは現在眼に映る景観・地形のまま昔を想像しがちなので、こういう点は要注意ですね。

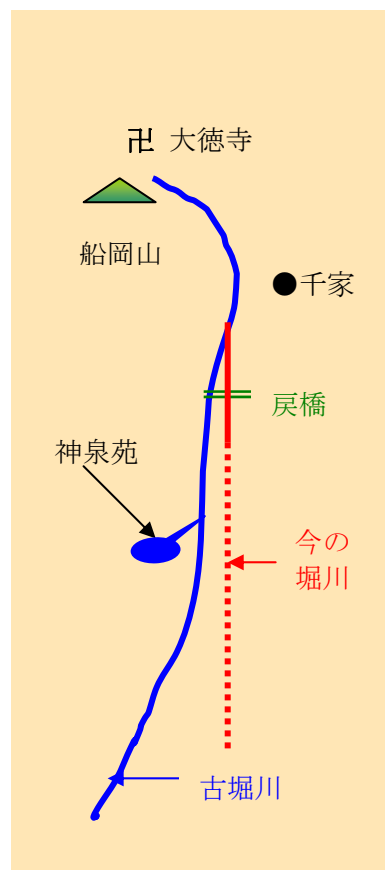
かつて、堀川界限は地下の伏流水にも恵まれていたので、「七名水」を始め清らかな井戸が多い地域です。例えば、左女牛井さめがいのい(醒ヶ井)や、小野小町伝説の残る草紙洗の井、さらには茶の湯千家の井戸などが挙げられます。伝説も歌舞伎も茶の湯の世界も、水の為せる代物でした。

ただ近年になると、地下鉄工事で水脈が断ち切られ、アスファルトで固めた地表からは雨水もしみ込まないなど、伏流水も枯渇気味となり、豆腐屋さんとか和菓子屋さんが困っていますね。

さて、堀川は造都段階から重要な役割＝建築資材(木材)を運ぶ運河としての機能を担いました。太い木材が、丹波山中から大堰川(嵐山)→桂川→天神川、そして堀川を遡って運ばれたそうです。かつては五条～六条辺りに貯木場が設けられて、多くの木材業者が軒を連ねる地域でした。

鎌倉～室町期には、堀川材木座と呼ばれる、材木販売を独占した商人の組織が成立しており、後の江戸時代を通じても存在しました。「丸太町」という通り名も、その名残りとのことです。

明治初期になると、大堰川から千本通りまで西高瀬川が開かれ、さらに鉄道の敷設(山陰線)によって、木材業者の多くが材木集散に便利な二条駅近く(千本三条付近)に集結していきました。今でも千本三条界限には銘木店が多く、以前は「材木町」と呼ばれました。(我が家のすぐ近所です)尚、木材業者が去った堀川沿いですが、以降は染色(京染)業者が多く集まりました。堀川の水質が鉄分と不純物の少ない軟水で、染物には最適だったからと言われています。



応仁文明の乱

応仁元年(1467)～明和9年(1477)

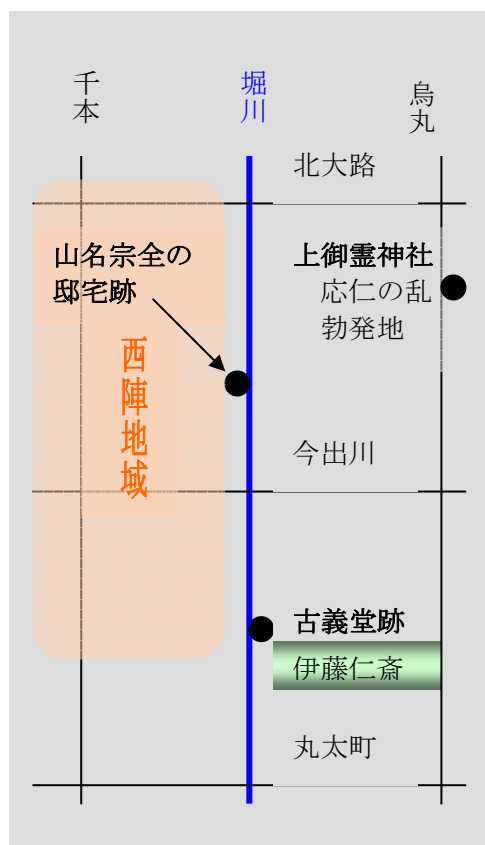
最終的な対立図式

西軍	東軍
	足利義政 (8代将軍)
足利義視 (義政の弟)	足利義尚 (義政の子) (9代将軍)
山名宗全	細川勝元
畠山義就	畠山政長
斯波義康	斯波義敏

堀川を挟み、11年に及ぶ戦い(応仁文明の乱)がありました。将軍後継問題や守護大名家の家督争いが二重三重に絡んで、日本史上最長の骨肉相食む戦いとなってしまったのです。

西軍の山名宗全が陣を敷いた地域は、高級絹織物の生産地であり、多くの商人や職工が集住する地域でした。この乱の後には「西陣」と呼ばれることになったのは有名な話です。

さて、この戦は野戦ではなく全くの市街戦となつたので、神社仏閣をはじめ一般庶民も甚大な被害を被っております。即ち、兵火で焼かれたか、破壊・掠奪されたということです。従つて、国宝・重要文化財が数多く存在する京都ですけれども、この乱以前のものになりますと、極めて稀な状況と言われるほどです。その意味では、文化史の面からも重要な戦いでありました。因みに、町衆がこだわり続けた祇園会(祇園祭)の山鉾巡行ですら、33年間も中断となっています。



古義堂 伊藤仁斎(1627～1705) (堀川通下立売)

「古義」とは「元々の古い教え、原典」という意味です。江戸時代には、儒教の教えを継承した朱子学が世の中の道理でありました。都においても儒学者の多くが私塾を開き、漢書(四書五経)を紐解きながら、朱子学について教授していました。儒者・伊藤仁斎もその一人です。

彼は、日常の生活に役立たない学問の在り方を否定し、京都の伝統と町人生活に立脚した、新しい学問の大成に取り組めます。その基軸として、孔子・孟子の教え＝古義に立ち帰ることが大切と考えたのです。故に、堀川沿いに開設された私塾も^{こぎどう}「古義堂」と命名されました。この塾は大評判をとって、最盛期には3,000名もの門弟が学んだそうです。当時では稀なことですが、女子にも門戸開放されています。また、当塾は仁斎の長男・東涯をはじめ優れた後継者を輩出したことでも知られて、その系統は「古義学派」あるいは「堀川学派」と呼ばれています。

なお、当時の塾運営で面白いのは「卒業」というものが無いことです。もちろん習熟に従って等級は上がっていくのですが、「これで終わり」という考え方が見られないのです。今風に言えば生涯学習とでも呼ぶべきかも知れませんが、学問・教育のあり方という面では一考に値しますね。

余談ながら、伊藤仁斎の生家も材木商であったと伝わっており、堀川沿いならではの一面です。明治初年まで続いた私塾ですが、現在では書庫であった土蔵のみが残っています。

堀河之水

著者：富尾左兵衛(俳諧師、俳号は蘆月庵似船)

元禄5年(1692) 発刊

「七條出屋敷十景」と題して、自宅(堀川七条南の鎌屋町)近傍の名所風物を紹介した案内書です。興味深いことに、堀川の源流は^{たかがみね}鷹峰と述べています。船岡山からは西北で、今では光悦寺が在る所で有名ですが、これに従うと、「賀茂川付替え説」は望み薄となりますね。

下記は近傍の代表的な景色ですが、当時の堀川沿いの風情が鮮やかに甦ってくるようです。

七條御旅所	田中の社	瓜田夕照	南里刈藍	村路若草
東寺の昏鐘	七條商客	堀河蛙聲	橋上秋月	祇陀林藤

概ね田畑の広がる郊外という印象で、七條を過ぎる辺りは人家もまばらであったようですね。ここでは瓜と藍しか登場しませんが、他にもナス・ネギ・ダイコン・セリ・ゴボウ・水菜などが産物として有名でした。「七條商客」とは、そうした産物を並べた青物市の賑いを示しています。「七條御旅所」は伏見稻荷社ゆかりの祭礼(神輿)の場面です。「田中の社」は小さい祠ですが、かつて和泉式部がお忍びで伏見稻荷へ通う途中で立ち寄った所です。「堀河蛙聲」とは川で菜っ葉を洗う作業歌の傍でカエルも一緒に鳴く様です。「橋上秋月」は観月の名所、木津屋橋のこと。平安朝の源融や小野篁も眺めたそうな。今日、橋は残っていませんが、木津屋橋通という名はあります。「祇陀林藤」とは別名歓喜寺あるいは広幡院と呼ばれ、藤の花で知られた名所です。二丁ほど北の柳遊郭(島原遊郭のこと)の人々もたいそう好んだ、と記しています。

尚、気付いたことと言えば、七條のすぐ北に在ったはずの本願寺(西本願寺)については、全く触れていませんね。本願寺は、この100年前に寺領を得て移転して来ており、周辺では寺内町も形成されていたはずですが、十分に存在感のある地域であったと思いますが、不思議なことです。七条以北の地域は対象外としたのかも知れませんが、ぜひとも詠んでみてほしかったですね。

さて、堀川通四条の少し北に堀川高校がありますが、私の母校です。在校当時には、川沿いの柳並木の風情は残っていたし、大雨の後などは濁流が渦巻いていた記憶が残っています。

また小学生の頃までは、そもそも行動半径も至って狭いものですが、この堀川通りの幅が広いものから、遊びの境界線ともなっていました。両親からも「遠くへ行ってはいけない」と釘をさされてもいたので、川の向こう側は、いわば「外国」のようなものでした。そんなものから初めて向こう側へ遊びに渡った時などは、たわいもなく興奮していたような気がします。

昨年は二条城築城400年記念で堀川沿いも賑いましたし、近年のオカルト・ブームというのか安倍清明ゆかりの清明神社も人気の観光スポットです。さらには、堀川の流れを取り戻そうとか、環境に優しい新型市電(LRT)を走らせようとか、堀川沿いに新しい町興し運動が起きています。

1998年の「^{みやこ}京の川再生検討委員会」で、堀川は再生のモデル河川に選ばれました。計画通りに進めば2008年には流水復活の予定です。水源は第二疏水(疏水分流)で、植物園南側を流れる水路から引き入れるそうです。堀川をも復活させる疏水というものは、やはり大したものですね。